

子どもたちは先生を見ている

LGBTの子ども達は、自分自身が嘲笑の対象とされる可能性があることや、存在そのものを否定されるようなメッセージを日々の生活の中で受け取ってしまうことが多くあります。

LGBTの子ども達は、ステレオタイプな見方で一括りにされるのではなく、個々の多様性を尊重したうえで、あるがままの存在を理解されたいと願っています。

LGBTの子ども達は、異端視、否定、揶揄や嫌悪される存在として学齢期を過ごすのではなく、LGBTであることを多様な在り方のひとつと捉えて生活できるような環境を望んでいます。

そのために、学校で出来ることはたくさんあります。先生に大きな期待があります。

図書館や保健室にLGBTに関する本を置くことや、学校内にポスターを貼るだけでも当事者である子ども

にとっては貴重な情報獲得の機会になります。ホームルームの話題としてLGBTの人権課題を取り上げることも重要な取り組みになります。学齢期の早い段階で多様性について肯定的なメッセージを受け取りそれを内面化することは、当事者である子ども達自身の自尊感情や自己肯定感を高めていくことのみならず、当事者ではない子どもにおいても人権感覚を養う貴重なきっかけになります。

LGBTの子ども達は、誰が信頼できる大人であるかしっかり見えています。この先生ならば自分のことをわかってくれるだろうと信じて、期待して、本当の自分の話をするのでしよう。

学校での取り組みや先生のさりげない一言が、彼らの人生を変えることになります。

子どもの“人生を変える” 先生の言葉があります。



LGBT情報・支援団体

同性愛者等のHIVに関する相談・支援事業
(公益財団法人エイズ予防財団)
http://www.jfap.or.jp/business/06_doseiai.html

SHIPIにじいろキャビン
<http://www2.ship-web.com/>
SHIPIほっとライン 045-548-3980 毎週木曜午後7:00~9:00

性と生を考える会
<http://say-to-say.com/>
「教職員のためのセクシュアルマイノリティサポートブック」
用語解説や学校生活での具体的な支援策をまとめた冊子。

ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート
<http://gay-report.jp/>

LGBTの家族と友人をつなぐ会
<http://lgbt-family.or.jp/>

LGBTを学ぶためのDVD教材(新設Cチーム企画)
<http://rupan4th.sugoihp.com/>
「いろんな性別～LGBTに聞いてみよう～」
小学5年生たちとLGBTの大人が特別授業を展開、実写とアニメで解説。
「もしも友だちがLGBTだったら？」
高校生のレスビアンを主人公にしたドラマとLGBTの大人へのインタビュー映像。

平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業

個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究

気になる子ども
いませんか？

クラスの子どもを 思い出してください。

自分のクラスの子どもが、同性愛者・性同一性障害かもしれないと考えた事がありますか？
統計により、「学校のクラスの1~2人は、いずれかのセクシュアルマイノリティである」ことが明らか
になっています。今こそ、同性愛・トランスジェンダー／性同一性障害といったセクシュアルマイノリ
ティについて、一緒に考えてみませんか？

こんな子ども、いませんか？ セクシュアルマイノリティの子どもたち

身近にいる子どもの話です～ クラスに1~2人という統計～

制服が着られない

「体が女だから、女の制服を着なくてはいけない。」
これが苦痛でたまりません。つらくて、恥ずかしくて、
とてつもない嫌悪感と違和感に襲われます。親は「一時
的な感情だ」と相手にしてくれませんか。
どうすればいいのでしょうか…。

イジメと不登校

「オカマ」「ホモ」「おとこおんな」「気持ち悪い」「近寄るな」…。
他の男子と何か違うところがあったのか自分でもわかりませ
んが、学校ではずっといじめられていました。しかし、いじめの
原因と思われることを先生や両親に言うことができず、学校へ
行けなくなり、不登校になってしまいました。

自傷行為

自分がゲイであることを自分自身ではそれなりに受け容れて
いたように思います。授業や先生、親から「同性を好きになっても、
両性であっても異常ではない」という肯定的な一言を言って欲し
かっただけです。自分を罰するような気持ちで、自分の体を故意
に傷つけました。

自分はどうなっていくの？ 将来に希望がもてない

自分が「レズビアン」と認識してから、このまま大人になっ
ていくのが怖いです。この先、私はどうなるんですか？ どうやって
生きていけばいいんですか…？

じつはカミングアウトしたい

もう、隠して生きるのは嫌だ。性同一性障害であることを、
みんなに打ち明けたい。体は男でも、自分が男であるとい
う自覚は全くないんです。自分らしく生きたい！

学校の先生

授業で先生が、TVでよく見るゲイやおネ
エタレントを笑い者にするような発言をしま
した。同級生のほとんどが、一緒に笑ってい
ました。何がそんなに面白いの？ ゲイは笑われ
る存在なの？ 僕は、みんなと一緒に笑った
振りをするのが精一杯でした。一緒に笑わな
ければ、みんなが僕のことをゲイだと思っ
てくれないかと、怖かったからです。

先生との交換日記

毎日、先生に勉強してきたノートのみても
らっていました。そのうち、同性が好きな自分
のことをノートに書くようになりました。先生
は毎日返事をくれました。高校時代にあの先
生に出会えたから、自暴自棄になることもなく
大人になれたと思っています。



LGBTの 子どもたちの実態

自殺を考える — 64%が自殺を考え、14%が未遂という現実 —

自殺を考えたことがある



自殺未遂をしたことがある



日本のゲイ・バイセクシュアル男性対象の調査(2005年有効回答数 5,731人)

2,095人の若者男女を対象に大阪で実施された街頭調査によれば、
異性愛男性と比較してゲイ・バイセクシュアル男性の自殺未遂
リスクは**5.98倍高い**、ということもわかっています。

「いじめ」と「不登校」

LGBTの子どもは、差別やいじめ被害の経験割合がとても高
いことが、国内外の調査結果で明らかになっています。彼らに
とって、学校が安全な場所ではなく、「ここでどうやって生き延
びていくことができるか」と、常に恐怖を感じる場所になってし
まっている場合も少なくありません。

自傷行為の危険性が高い

10代のゲイ・バイセクシュアル男性の自傷行為の生涯経験割合は
17%であり、首都圏男子中高生の自傷行為7.5%と比較しても2倍以上
であることがわかっています。自傷行為は繰り返す傾向にあり、自死と
いった最悪の結果にならないために、私達に何ができるのでしょうか。

LGBTの 子どもたちの実態

「体の性」と「心の性」 — 性をどのように認識し、 どのように考えるか —

さまざまな「性のあり方」

生まれた時の性別である「体の性」と、自分が自覚し
ている「心の性」は、必ずしも一致するものではありません。さらに、「男だから女が好き」とは限らないし、
「女だから男が好き」とは限らないのです。実際、「性の
あり方」は多様で、例えて言えば「グラデーション」のよ
うなもの。しかし、現実には偏った情報もあり、子ども
が正しい知識を得ることが困難な場合もあります。

LGBTってなに？

- L** (レズビアン) 女性の同性愛者
- G** (ゲイ) 男性の同性愛者
- B** (バイセクシュアル) 両性愛者
- T** (トランスジェンダー) 生まれた時の法的・社会的性別
とは違う性別で生きる人、生き
たいと望む人

子どもが抱える性の多様性「同性愛」や「トランスジェンダー/性同一性障害」

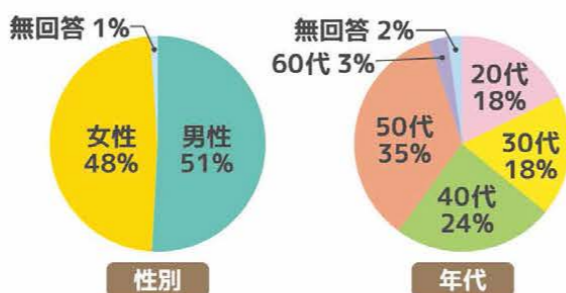
6自治体で実施した今回の調査について

(調査実施期間：2011年11月～2013年2月)

国民の5%がLGBTであることが推定されているこの時代に、私達はどこで正しい知識を得ることができるのでしょうか。この度は教育現場の先生方にご協力をいただき、LGBTと教育について実態把握のための調査を実施しました。最近では、HIV/AIDSや性感染症、いじめや不登校の背景要因としてLGBTであることの関与が指摘されるようになってきました。

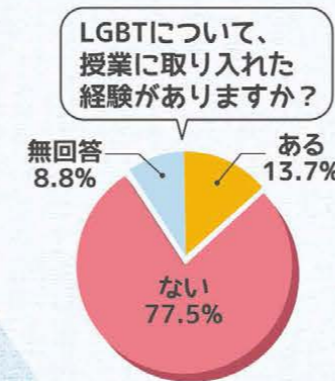
集計結果の概要をご報告することを通じて、子ども達の多様性の理解の一助となることを心より願っております。

アンケート回答者(有効回答数 5,979人)



保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校に所属する5,979人(平均年齢43.4歳)の先生方にご回答いただいたアンケートの結果をもとに、教育現場におけるLGBTについて考えてみたいと思います。

3 なぜ、LGBTについて、授業で取りあげないの？



授業に取り入れられない理由



LGBTである子どもの自尊感情を育てる

授業で教える必要があると認識している一方、実際に授業で取り扱った経験は低率でした。LGBTについて先生から子ども達に投げかけてみませんか？簡単な話題でも大丈夫です。LGBT当事者の子どもは、不安や戸惑いを解消するために、肯定的な情報や正しい知識を欲しています。授業で少しでもセクシュアリティの多様性について話題になることや、肯定的なメッセージが発せられることは、きっと何かの救いになるはずです。

1 LGBTについて、授業で取り扱う必要がある

教育の現場で教える必要があると思いますか？



半数以上の先生が「必要」と考えています

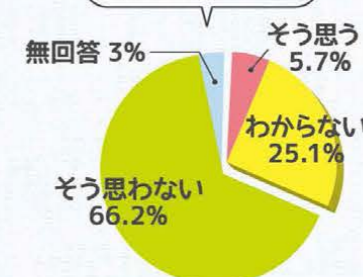
現在、LGBTについて授業で取り扱うことを実践している学校は、まだまだ少数です。しかし、実際に教育の現場に立つ先生方の半数以上が「必要がある」と捉えていることが明らかになりました。もしかしたら、子どもに教える必要性を認識している先生の気持ちに、教科書が追いついていない現実があるのかもしれません。

4 同性愛についての間違った理解

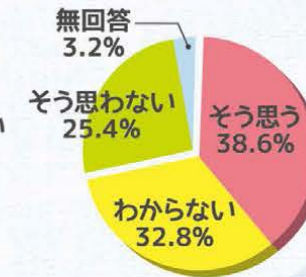
性的指向は選べるの？

大変興味深い結果が示されました。約7割の先生が、性的指向は本人の選択によるものであると誤解していることがわかりました。「同性愛者になることは、個人に選択権があり、拒否することも、受け入れることも自由なのだ」という理解は誤りです。性的指向は嗜好や志向とは異った「指向」であり、生まれ持ったものであると捉え、理解することが適切です。

同性愛は精神的な病気のひとつだと思いますか？



同性愛になるか異性愛になるか、本人の選択によるものだと思いますか？

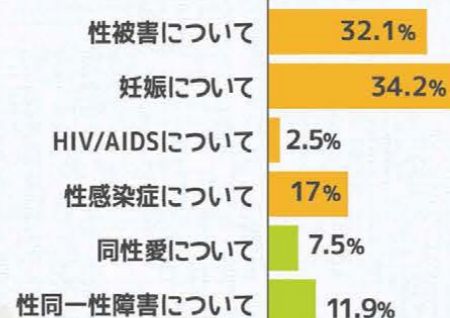


2 LGBTの子どもと関わった経験のある先生はごく少数

教える必要性を感じているのに、なぜ？

LGBTについて子ども達と関わりをもった経験がある先生は、ごく少数でした。それに対し、妊娠や性被害は3割以上、性感染症は2割近く関わった経験があることがわかりました。男性同性間におけるHIV感染の拡大が続いている現在、HIV/AIDSや性感染症の予防教育実施の時は、セクシュアリティの多様性について扱うことも重要です。また、LGBTの子ども達の存在は可視化されづらい側面がある一方、彼らは困っている時に周囲の大人に相談することや、助けを求める援助希求行動そのものを躊躇する場合があることに留意が必要です。

実際に生徒と関わったことがありますか？



5 私たちの「20人に1人はLGBT」だという現実

これまでの教員生活で、同性愛、性同一性障害と思われる児童、子どもはいましたか？



20人に1人はLGBT

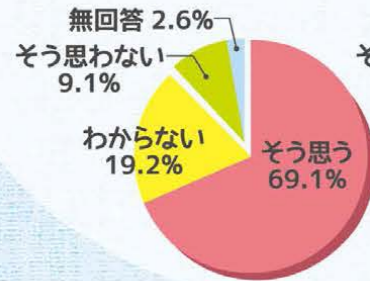
2012年に電通総研が約7万人を対象に実施した調査では、5.2%がLGBTであると回答しました。つまり、セクシュアルマイノリティであるLGBTは、20人に1人の割合で存在するということです。

それでも男女の区別

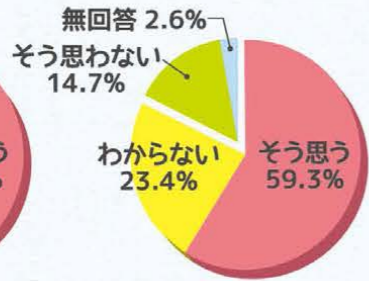
世の中には「男と女」に区別されているものがたくさん存在します。もちろん、学校の中も例外ではありません。例えば、出席簿の順番や「さん、くん」などの敬称、制服、部活動、進路など、男子と女子を区別しているものが数多くあります。このように日々の生活の中で「あたりまえ」と思われている男女の区別が大変辛く、受け入れがたく感じている子どもも存在します。

6 LGBTについての世間の目、そして教師の目

多くの人、
同性愛に偏見を
持っていると思う



多くの人、
性同一性障害に偏見を
持っていると思う

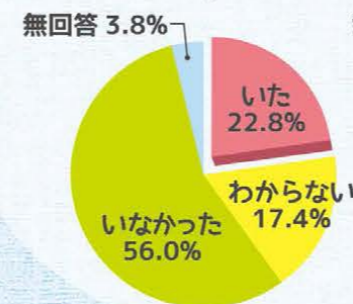


世間はLGBTに対して否定的？

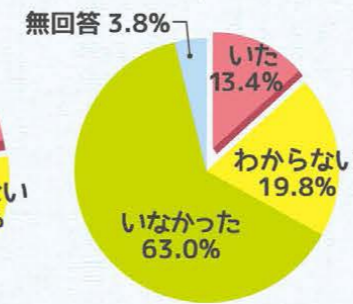
世の中がLGBTについてどう感じているのかをお聞きすると、半数以上が「LGBTは世間から偏見を持たれている」と認識していることが分かりました。さらに、そこへ「わからない」の回答を加えると、8割以上が世間はLGBTについて否定的であると捉えています。テレビではおネエタレントが活躍していますが、世間の風当たりはまだまだ厳しく、差別認識を明確に持っているということでしょう。

9 子どもたちにおける同性愛についての差別的な言動

同性愛について
差別的な言動をする
生徒がいた(する側)



同性愛について差別的な
言動をされている生徒が
いた(される側)

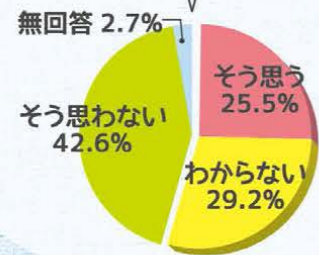


差別的な子どもたちの言動を見逃していませんか？

現在のマスメディアでは、「おネエ」「ホモ」といった言葉で同性愛を揶揄することが多くみられ、笑いのネタとして、子ども達にもこれらの言葉が浸透しているようです。しかし、セクシュアリティに関する言葉の暴力(からかいや差別的な言動を含む)により、自尊感情を深く傷つけられる子ども達が一定数存在していることや、それが深刻ないじめや不登校、自殺未遂につながる可能性も十分にあります。差別的な言動をされている子どもからSOSを発することが困難であることを考慮すれば、先生や大人達が見逃してしまうことが決まってしまうように、場合によっては積極的な関わりや介入も必要です。

7 同性を好きになること(同性愛)

正直な気持ちとして、
同性愛のことは
理解できない気がする



子どもの心を想像してみてください 恋愛対象が「同性」ということ

「異性を好きになることがあたりまえ」という異性愛が自明視される社会で、同性を好きになる自分に気付く子どもの心を想像してみてください。自分自身を異端視するばかりでなく、学校で「あいつは気持ち悪い」と友達や先生から偏見や差別を受けるLGBTの子どもは少なくありません。性的指向は本来個性があり多様なものです。ゲイ・バイセクシュアル男性は平均年齢13歳の時に「ゲイであることをなんとなく自覚」していますが、異性愛ではない性的指向を誰にも言えずに過ごしている場合が大半です。



10 出身養成機関での実施状況は・・・

同性愛について
出身養成機関
で学んだこと
がある

7.5%

性同一性障害
について出身
養成機関で学
んだことがある

8.1%

自傷行為につ
いて出身養成
機関で学んだ
ことがある

19.4%

不登校につい
て出身養成機
関で学んだこ
とがある

29.4%

いじめについ
て出身養成機
関で学んだこ
とがある

31.3%

「学ぶ機会がない」という現実をどうする？

出身養成機関で「いじめ」「不登校」「自傷行為」について学んだ割合は2~3割、LGBTについては1割にも満たないという結果に。しかし、LGBTの子ども達の多くが学齢期にいじめや不登校、自傷行為に直面しているという調査結果もあります。いじめや不登校、自傷行為の背景要因として、もしかしたらセクシュアリティのことがあるのかもしれない、といった想像力を持ち、アンテナを高く立ててみてください。

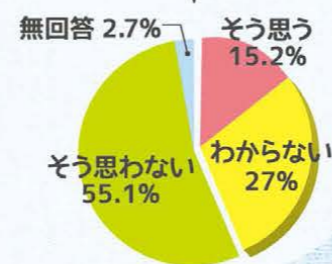
8 自分の性別に違和感を持つこと (トランスジェンダー/性同一性障害)

子どもの心を想像してみてください 自分の性別に対する違和感

学校では、男か女のどちらかに区別されることが数多くあります。その度に性同一性障害をもつ子どもは苦痛を感じています。本当の自分のことを言えない、理解されないであろうという心的葛藤に加えて、第二次性徴の時期に自分が望まない体に変化していくことに絶望すら感じています。性同一性障害をもつ女子(男子)生徒なら典型的な男性(女性)になることを望んでいるとは限らず、男性か女性のいずれかに自分を定義することが出来ずに、苦悩する子どもも存在しています。



正直な気持ちとして、
性同一性障害のことは
理解できない気がする



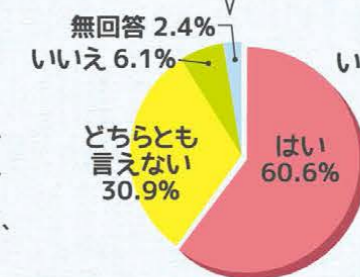
11 きちんと知ると、子どもとの関わり方が変わる

正しい知識と理解、そして実践

情報過多なネット社会ではいつでもどこでも数多くの情報を得ることが可能です。しかし、その全てが正しいとは限らず不適切な情報も氾濫していることも事実です。

LGBTに関する情報は面白おかしく脚色して伝えられていることもあり、信頼できる情報であるか注意が必要です。正しい知識のもとに正しく理解することが何より大切であり、まずはきちんと知ること。それが、学校におけるLGBTの存在を深く理解・支援することにつながります。

性の多様性に関する
研修があれば
参加したいですか？



学生時代に性の多様性に関する授業があれば履修したかったですか？

